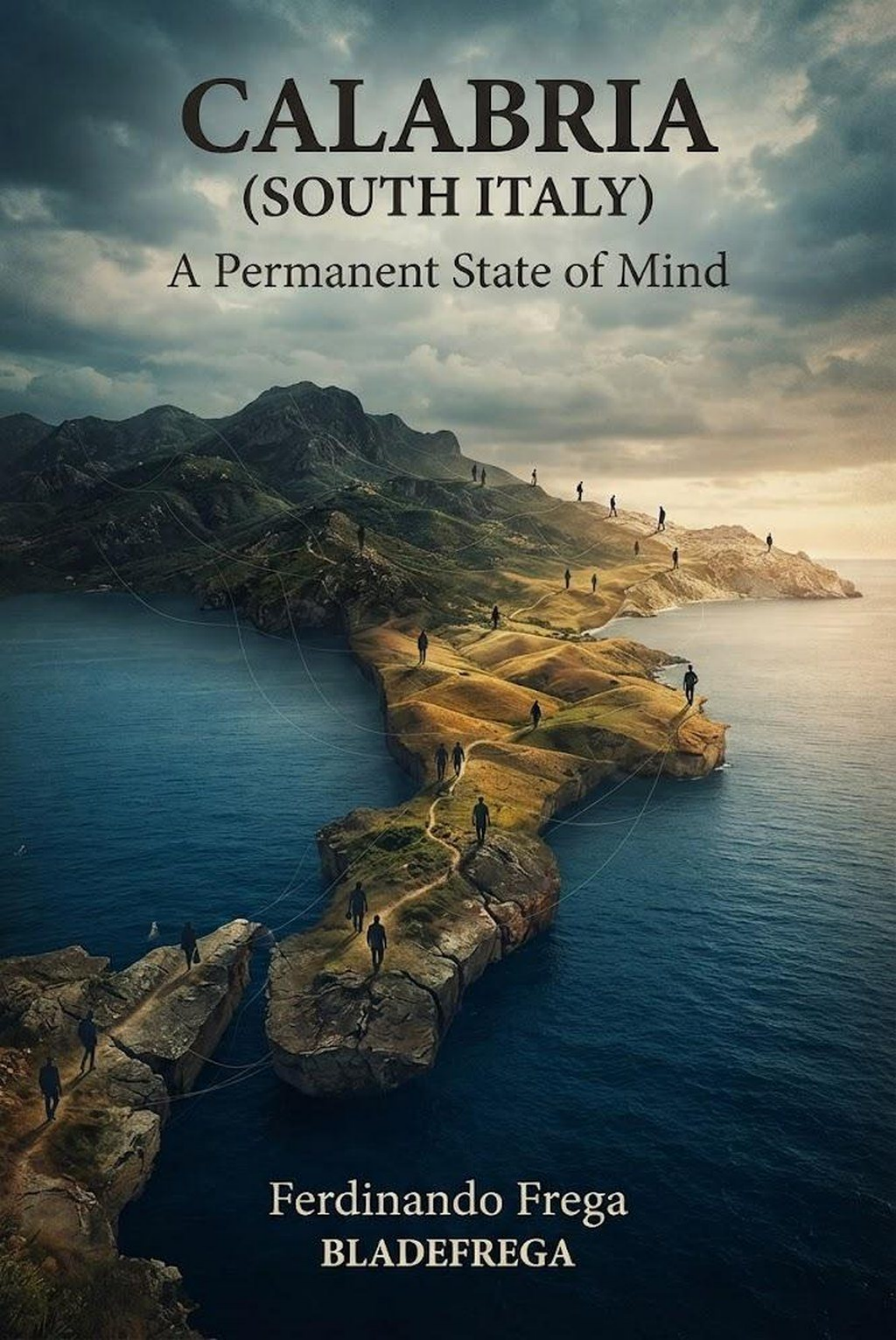

CALABRIA
(SOUTH ITALY)
A Permanent State of Mind
Ferdinando Frega
BLADEFREGA

カラブリア（南イタリア）

THE FAMILY · 09

ウェブ上に出回っている最新の情報によれば、この土地は何百万年も前、イタリアがまだあの有名なブーツの形になっていなかったころ、今のサルデーニャとつながっていたという。

やがて、アフリカへ向かう地殻の引力、地震、移住、人々、野心、信仰、そして必要なあらゆる精神性がやってきた。ついに分離が起こり、カラブリアはブーツ形の半島にくっついた、イタリアの爪先になった。付け加えるなら、先のとがったブーツだ。誰かの尻を蹴飛ばしてやる必要があるときに使う類の履物である。もっとも、多くの人はそれを女性の優雅さと呼んで譲らないのだが。

だが、この人々は何者なのか？

注意深く見ていこう。欠けているのはカラブリアの歴史ではなく、カラブリアの住民とその起源についての概念なのだから。

私の構造分析は、もっぱら経験にもとづいている。これから述べることについて、私は学位も、公的な権威も、科学的な認証も持っていない。教授でもなければ研究者でもない。

私はただ、観察したとおりの事実と、身につけたとおりの知識を伝えるだけだ。

お墨付きも批評も必要としない、二つのもの。

そして、真実だけを。

あははは。

当初カラブリアを形づくっていた三つの県 — 北のコゼンツァ、中部のカタンザーロ、南のレッジョ・カラブリア — は、気質、文

化、社会的なふるまいにおいて、すぐさま深い違いを見せた。

北、コゼンツァの周辺には、村と山の民が暮らしている。信念と郷土への忠誠を刃に変えた民。論じ、説得し、自分の重みを演出する、際立った能力を育てた人々だ。

この70年間にカラブリアの政治を形づくってきた男たちの多くが現れたのは、ここである。

彼らはカラブリアの隅々から票を集めた。売るものがほとんどないときでさえ、自分を売り込むすべを知っていた。

ちょっと私に似ている。

あはははは。

中部にはカタンザーロがある。丘と商いと移動の民だ。

伝説によれば、もともとカタとザーロという二つの集落が、橋をはさんで分かれていた。やがて二人の首長の子どもたちが結婚し、ひとつの町が生まれた。

本当かどうかは、どうでもいい。

商いが彼らの天然資源になった。

起業が本能になった。

今日に至るまで、彼らのDNAには、機会を見抜き、状況と駆け引きし、事態を経済的な価値へと変える力が残っている。

機会と機会主義はいとこ同士だ。どちらも同じ経済の一族に属している。

彼らこそ、カラブリアの真の起業家である。

そして南だ。

レッジョ・カラブリア。

海の民。

何世紀ものあいだ、ありとあらゆる文明がそこに上陸した。フェニキア人、イタリア人、シチリア人、交易者、軍隊、夢見る者、冒険者、征服者、そして商人。

多くは征服を期待してやってきた。

そして多くが、そこにすでに住んでいた人々がふさわしい歓迎を用意していたことを知った。

レッジョの人は、比類のない才能を育てた。政治、ビジネス、一族のネットワーク、個人の影響力、そして地域の支配を、統合された権力のシステムへとまとめ上げる能力である。

ときにその能力は、制度や企業や商業的な成功を生んだ。

ときには、独自の論理と規則に従って動く、もうひとつの権威の構造を生んだ。

愛するにせよ憎むにせよ、彼らはこの地方の歴史の一部になった。

だが、この同じ土地は、天才たちの土地でもある。

ラッファエーレ・ピリアがいた。カラブリアが生んだ最も偉大な科学者のひとりで、化学への貢献は近代科学に消えない足跡を残した。だが、その評価は、よそで握られた正統性の仕組みを通じてもたらされた。

コッラード・アルヴァーロがいた。作家であり、知識人であり、語り部であり、幾世代もの人々をその言葉の虜にした。

そして、ほかにも数えきれない人々がいた。

科学者。

芸術家。

マネージャー。

起業家。

専門職。

カラブリアを離れて、ようやく成功した人々。

なぜなら、それこそがこの土地の最も奇妙な特徴のひとつだからだ。

あなたが成功したとすれば、それはたいてい、カラブリアの外の誰かが先にあなたの価値を認めたからだ。

カラブリアの中だけで重要だと見なされているなら、その祝福は短く終わりがちだ。

現実というものは、決まって割って入ってくる。

それも、すぐに。

あはははは。

おそらく、これがカラブリア最大の逆説だろう。

才能に富みながら、それを認めることには慎重な土地。

卓越したものを生み出す力がありながら、自らそれを保証することにはしばしば気が進まない土地。

最良の人々を輸出し、その評判を故郷へ逆輸入する土地。

それでも、何があろうと、人々はこの土地への愛着を失わない。

彼らは去る。

批判する。

不平を言う。

二度と戻らないと誓う。

そして残りの人生を、カラブリアの話をして過ごすのだ。

そうなると、カラブリアは場所ではないのではないかと思えてくる。

それは、ひとつの状態なのだ。

永遠に続く心のありよう。

フェルディナンド・フレーガ
Gillette Man ⚔️